

静嘉堂文庫蔵『衣笠内大臣集』——翻刻と紹介——

徳 植 俊 之（大東文化大学文学部）

Seikado Bunko Art Museum “Kinugasa Naidaizin shu”: Introducing Its Reprint

Toshiyuki TOKUUE

一 はじめに

衣笠内大臣藤原家良には、『後鳥羽院・定家・知家人道撰歌』と『衣笠前内大臣家良公集』の二系統の家集が現存し、また古筆切には家良自筆とされる「御文庫切」や伝定家筆「五首切」、さらに伝二条為氏筆六半切の存することが明らかになっている。⁽¹⁾ 伝二条為氏筆六半切については、拙稿⁽²⁾で新出断簡の紹介をかねていささかの考察をめぐらしたが、その際、伝為氏筆切がその書風からして鎌倉時代後期の書写にかかり、静嘉堂文庫蔵『衣笠内大臣集』ときわめて近い関係にあることなどを指摘した。

静嘉堂文庫蔵『衣笠内大臣集』（以下「静嘉堂本」と略称する）は『後鳥羽院・定家・知家人道撰歌』の伝本の一つで、樋口芳麻呂が『私家集大成』「家良」解題で指摘しているとおり、宮内庁書陵部蔵本（四〇六・二二二、以下「書陵部本」と略称する）と比較すると「歌序の錯乱が甚だしく」、「錯簡などを有した祖本からの転写本」と見られる本である。しかしながら、その書写年代は鎌倉時代後期と現存諸本の中では格段に古く、しかも書陵部本と比較すると、明らかにその本文の方が優れていると判断される箇所もあり、その資料的価値は高いと思われる。そこで本稿では、静嘉堂本について書陵部本及び内閣文庫蔵『賜廬拾葉』所収本との比較検討を試み、さらに静嘉堂本文を翻刻紹介したい。

二 静嘉堂本と書陵部本

静嘉堂本については、拙稿³⁾においてもその乱れの実態と特徴について、以下の点を指摘した。

- (1) 静嘉堂本の歌順の乱れは親本の段階で生じていた錯簡によるものであり、静嘉堂本はその親本を忠実に書写していたと推定される。
 - (2) 静嘉堂本の親本は、錯簡をおこす前は書陵部本と同系統の本であったと断定できる。
 - (3) 静嘉堂本では「京極入道中納言撰」の右側の「定家」の文字が擦り消され、「大宮三位入道撰」の右傍には「知家」と書き加えられている。
 - (4) 書陵部本一四二の上句と下句の間には二行分の空白があるが、静嘉堂本では詰めて一首の和歌として書写されている。
- ところで、全体の歌数に関しては、書陵部本の七七下句から八五上句まで、一六六から一六九上句まで、一九九下句から二〇三上句まで、二〇七下句から二一〇までの四カ所の歌本文を欠いており、書陵部本に比して歌数も少ない。

また、本文を比較すると、次の異同箇所が確認できる。(静||静嘉堂本、書||書陵部本)

- | | | | | | |
|-------|------------|-------------|-------|------------|------------|
| 七八下句 | みちをやはみむ(静) | ―道やはみむ(書) | 八四上句 | なくさむかたも(静) | ―なくさむ方の(書) |
| 一〇六下句 | かすまさりけり(静) | ―霞まさりけり(書) | 一三五下句 | 身をはなけ、と(静) | ―身をは歎くと(書) |
| 一四〇上句 | よものかすみの(静) | ―よもの紅葉の(書) | 一四四下句 | あさのさころも(静) | ―天のさころも(書) |
| 一七三詞書 | 山家恋(静) | ―山家(書) | 一九五上句 | ふりたて、(静) | ―ふりすて、(書) |
| 一九八上句 | まつはかひなき(静) | ―まつはかひなき(書) | | | |

これらの異同箇所を見ると、明らかに静嘉堂本の方が優れていることが知られる。書陵部本七八では字足らず(脱落)による本文の乱れが静嘉堂本によって訂正される。また、一〇六も静嘉堂本と比較すると書陵部本の「霞」は誤りである。一九八も私家集大成では「ママ」としているところだが、これも静嘉堂本によって訂正される。一三五は、静嘉堂本の「嘆けど」でなければ意味が通じない。書陵部本の「嘆くと」は誤りである。一四〇も、「春」題であるからこゝは静嘉堂本の「よものかすみの」の方がよく、書陵部本の「紅葉」では季節が合わない。また、一七三詞書も、和歌の内容からして「山家恋」の方がよい。

このように、静嘉堂本は書陵部本の誤りや不審箇所を訂正し、本文としては静嘉堂本の方が優れていると言えよう。

三 静嘉堂本と内閣文庫蔵『賜廬拾葉』所収本

『後鳥羽院・定家・知家人道撰歌』の伝本としては、静嘉堂本の忠実な転写本といわれる内閣文庫蔵『賜廬拾葉』(二二七・一一)所収本(以下「内閣文庫本」と略称する)も知られている。内閣文庫本は和歌一首一行書きで、一面九行、静嘉堂本と歌順が一致する。また、奥書には、「右一卷以為氏卿真跡本書了原本所々有落丁可惜」とあり、為氏筆本すなわち静嘉堂本を写したること、原本に落丁のあることが記されている。さて、内閣文庫本で注目されるのは、静嘉堂本で明らかに上句と下句が別の和歌である部分を、当該本ではそのまま一首の和歌として書き写している点である。たとえば、静嘉堂本では、七七上句と四下句が並んでいる箇所は、内閣文庫本では一首の和歌として一行で書かれている。

〈静嘉堂本〉

山ちかきさほの河とのゆふきりに (七七上句)

われのみしたふ春のかりかね (四下句)

〈内閣文庫本〉

やま近きさほの河せの夕霧に我のみしたふ春の鴈かね (二二八)

この場合、本来は別の和歌の上句と下句であったにもかかわらず、それを一首につなげたため、季節の齟齬が生じている。内閣文庫本では、そうした意味上の矛盾があっても、静嘉堂本を忠実に転写しようとしていた書写態度が窺われる。

ただ、静嘉堂本で上句しかない箇所、たとえば静嘉堂本十八丁表の最終行の歌は、「伊勢の海のをの、みなとのをのつから(二一五上句)」とあるだけで、続く十八丁裏の本文は一二八の上句から始まっているが、この部分を内閣文庫本で見ると、

伊勢の海のをの、みなとのをのつから 下句欠

とある。逆に静嘉堂本二十九丁裏の一行目は、一六九下句から書き出されているが、この部分は、内閣文庫本では、

已上脱落 ゆふつけとりのねになかれけむ

と書かれており、上句あるいは下句のみある場合は、そのことを注記している。

また、書陵部本では八八と一九六にあたる、内閣文庫本一九四と一九五は、

あさなくうつろふころの桜川しらゆふ花に春かせそふく (内一九四・書八八)

前脱落 くれなゐの薄そめ衣きても猶こひのなみたの色はみえけり (内一九五・書一九六)

と書かれ、「前脱落魄」の注記がある。ここは静嘉堂本では三十丁裏と三十一丁表にあたる。三十丁裏の三首が「春」題であるのに対し、三十一丁表の「くれなゐの」は恋歌であるから、この並びの矛盾に気づき落丁を想定したのであろう。

ところで、書陵部本では「定家京極入道中納言撰」とあるところが、静嘉堂本では「定家」の部分で擦り消され「京極入道中納言撰」となっているが、ここは内閣文庫本でも同様に「定家」の名が消されたまま写されている。一方、静嘉堂本で「大宮三位入道撰」の右傍に「知家」と書き加えられている箇所は、内閣文庫本でも同様に書かれている。このことから、静嘉堂本において「定家」の文字が消され、「知家」の名が書き加えられたのは、内閣文庫本が書写される以前のことであったと考えられる。静嘉堂本におけるこれらの削除及び追加がどの段階で、また同時に行われたのか否かについては不明であるが、少なくとも内閣文庫本が転写されるより以前であったことは動かない。

なお、静嘉堂本十五丁裏の最終行は一行空白になっているが、こうした空白箇所は内閣文庫本では空白行とせず詰めて書写されている。

注

- (1) 樋口芳麻呂『私家集大成』「家良」解題、田中登『続々国文学古筆切入門』（和泉書院）134頁。
- (2) 拙稿「新出の伝二条為氏筆六半切と静嘉堂文庫蔵『衣笠内大臣集』」（『文教大学国文』第46号 平成29年3月 文教大学国文学会）
- (3) (2) 38～41頁。

四 静嘉堂本本文の書誌と翻刻

〈静嘉堂文庫本『衣笠内大臣集』〉

【寸法】 縦15・3cm、横15・1cm。字高14・0cm。

【装丁】 列帖装。四括り（一括五枚、二括四枚、三括四枚、四括三枚）。表紙は秋草文を刺繍した布地表紙。裏表紙も同様。見返しは銀箔散らし。

一丁表右下に「静嘉堂現蔵」の蔵書印。一丁裏、二丁表は遊紙。三十二丁表、裏も遊紙。

本文は二丁裏より。墨付け三十一丁。一面八行。

【題簽】 なし。

【本文】 *本文下の数字は『私家集大成』の歌番号。「上」「下」はそれぞれ上句、下句を示す。

静嘉堂現蔵(蔵書印)

(白紙)

(白紙)

後鳥羽院御撰

- | | | |
|----|-------------------|----|
| 1 | さをひめのかすみの衣たちそめて | 1ウ |
| 2 | 花のひもとく春はきにけり | 2オ |
| 3 | みよしの、山のはかすむ春ことに | |
| 4上 | 身はあらたまのとしそふりゆく | |
| 4下 | さえあへぬゆきまかすめる春日野に | |
| 12 | をちかた人やわかかなつむらん | |
| 13 | としをへてしのはぬなかのわかれちに | |
| 14 | たまぬくつゆのをかぬ日はなし | |
| 15 | 秋はなをなみたになれてみむる山 | |
| 16 | しくる、みねにしかはなくなり | |
| 17 | 白妙のつきのひかりにをく霜を | |
| 18 | いく夜かさねて衣うつらん | |
| | さよなかと夜はふけぬらし玉島の | |
| | かはをとすみてちとりなくなり | |
| | さとわかぬ春のひかりもまちわひぬ | 3オ |
| | そてのこほりのむすふうらみに | |
| | 袖のうへにさやはなみたのこほるへき | |
| | 月まつ人といひはなすとも | |
| | しのひかねなみたのたまのを、たえて | |
| | こひのみたれそ、てにみえゆく | |



こゝろのうちをしる人もかな
庭の面のくさのしけみのさゆりはも

82

花にしらるゝなつはきにけり

あまの戸のあくるほとなきみしか夜に

83

ゆくかたとをくのこる月かけ

みのうさのなくさむかたもなきまゝに

84

なさけあれなど世をおもひつゝ

(二行分スリ消シタ跡アリ)

┌ 9ウ

(白紙)

□ (削ツタ跡アリ。「定家」ト書カレテイタカ)

┌ 10オ

京極入道中納言撰

あらたまのとしのゆきゝの夜の程を

26

まつしるものはかすみなりけり

さほひめの霞の衣たちそめて

27

花のひもとく春はきにけり

さえあへぬ雪まかすめるかすかのに

28

をちかた人やわかかなつむらん

あさほらはまなの橋はとたえして

┌ 10ウ

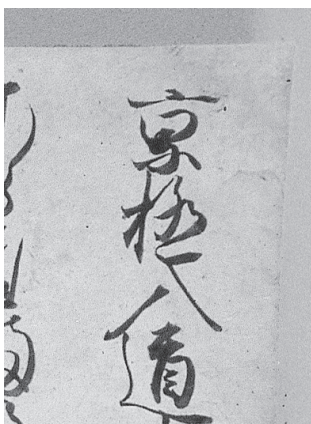
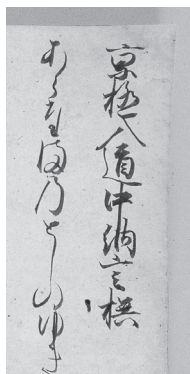
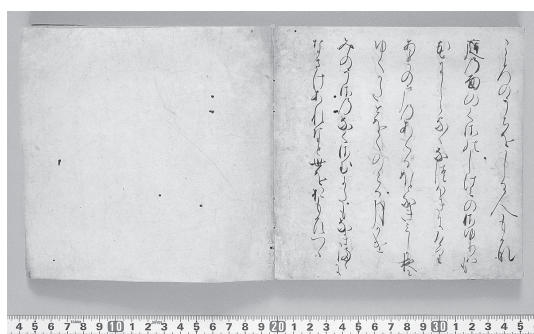
29

かすみをわたるはるの旅人

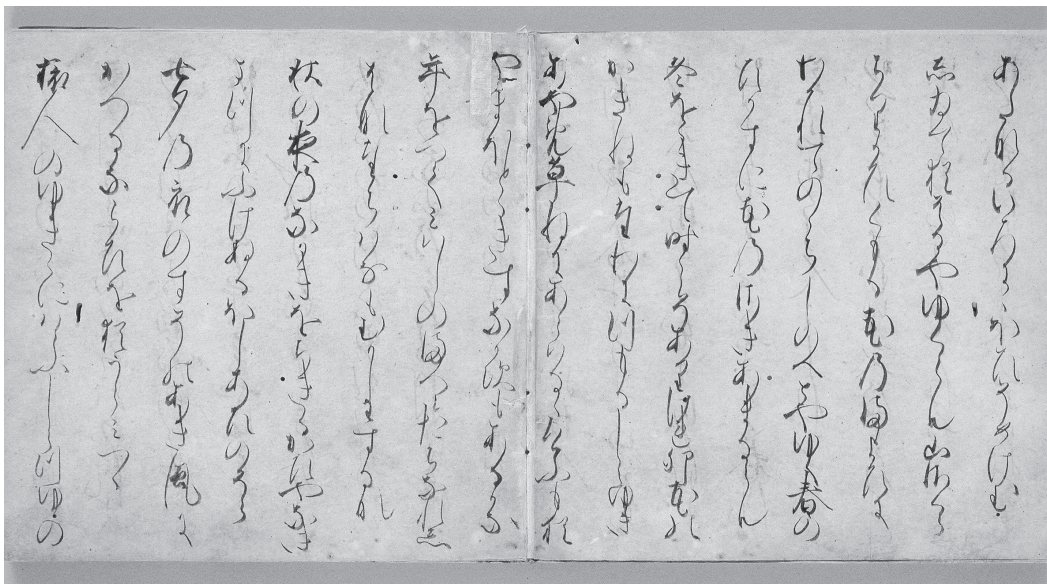
うつし裁て春をゝそしとまたれつる

30

わか木のさくら花にさかなむ



かすみよりもれてふきくる春風に とを山さくら人にしれつ、	31
かへるかりかすむゆふへのわかれちに 雲の衣のうらみかねつ、	32
さくら花おちても水のあはれなど あたなるいろに、ほひそめけむ	33
しるて猶はるやゆくらん山さくら ちりかひくもる花のまよひに	34
わかれての、ちしのへとやゆく春の ひかすに花のさきあまるらん	35
冬を、きて時こそありけれ卯花の かきねもたわにつもるしらゆき	36
あやめ草ねにあらはる、けふも猶 やまほと、きすなかくもあるかな	37
年をへてみはしのまへにたちなれし はなたちはなむかしわするな	38
秋の夜のなかきをちきるかひやなき まつにふけぬるほしあひのそら	39
七夕の衣のすそのあき風に かへるならひを猶うらみつ、	40
旅人のゆき、にはらふしらつゆの をちかたのへのもとあらのはき	41
あまつそら雲のはたての秋風に さそはれわたる初雁のこゑ	42



佐保山のこすきも色やまさるらん
きりたつそらにかりはきにけり

43

おさをあらみあさのしつはたうちへて

205

秋のいろのいつくはあれとはしたかの
とかへる山のみねの月かけ

44

あはぬまとをになけくころかな
すみよしの岸におふてふ草の名の

206

よのまのみねたちのほる月影の
あとなる雲は猶しくれつ、

「 12
ウ

45

ひとのこゝろになとしけるらん
あひみすはよしたえはてねなか、らぬ
あひ見るほとのみまもかな

「 14
オ

207
上

かせさゆるあしまあらはにすむ月の
霜をかさぬるをしのけころも

46

あけぬとてみねのよこ雲わかれなは
みやこをとをみいつかあひみむ

115
下

はらひかねうきねにたえぬ水鳥の
はかひの山もしもやをくらん

47

旅
さと人のゆつきかたけの朝霞

116

はつゆきはらふいはせの、原
雪ふかき冬木の梅のにほふより

48

春
たなひくころになりにつけらしも

117

忍山したくさかけてをく露も
あきにはあへすいろそうつろふ

50

秋
をきまよふ霜夜の月のふかきよに
とをきさと人衣うつなり

「 14
ウ

131

草かれのあはつのはらにかる鳥の
かくれぬものはおもひなりけり

51

恋
さても又ひとのこゝろのつらきえに
たな、しをふねなをやこかれむ

132

いかにせむ涙のそてに海はあれと
おなしなきさによるふねもなし

52

みせはやなありし別のやすらひに
ぬれしま、なるそての月かけ

133

しらせはやあまのもしほのたれゆへに
うちもたゆまず人そ恋しき

53
上

「 15
オ

134

しらせはやさの、ふなはしくめより
こゝろにかけて人をしのふと

203
下

雑
うき世いとふ心のいかてなかるらん

135

こゝろにかけて人をしのふと

204

135

204

135

おもふによらぬ身をはなけ、と

秋

ときは木のなかまにまされるうす紅葉
いろこきよりもおくそゆかしき

(二行空白)

春

たまきはるいのちあらはとまたれこし

花のさかりになりにつける哉

うきものといひやはなさむ春のかせ

ふけとふかねと花はちりけり

秋

そてぬれてうへし山田のほともなく

かりほす秋になりにつける哉

冬

あさなくしくる、ころの山風に

このはふりそふ神なひのもり

雑

なへて世の人こそさらにつらからね

わかこ、ろたに身をはおもはず

春

かたをかをあしたのはらの玉やなき

いとよりかくるはるはきにけり

さくらさくあまのかこ山はるもなを

たかしろたへの衣ほすらん

「 15
ウ

「 16
オ

「 16
ウ

136

176

177

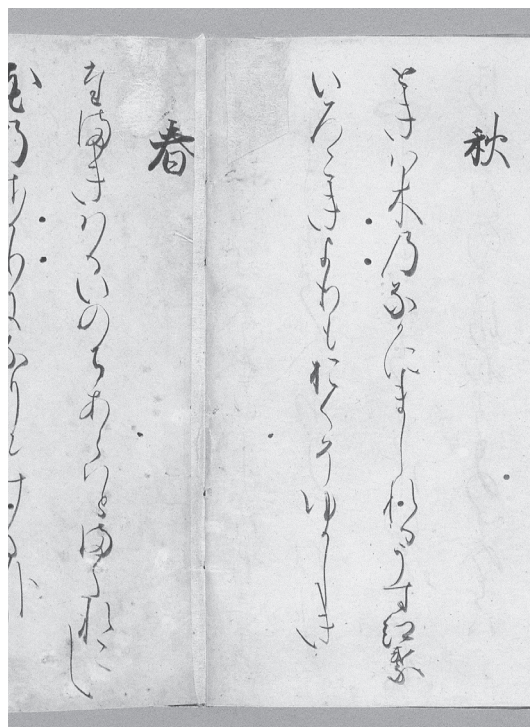
178

179

180

181

182



つれもなくたのむのかりはわかるれと
かすめる山に月そのこれる

たをやめのかすみの衣かへしても

うらみつきせぬ春のくれ哉

夏

なには人ひかすふりゆくさみたれに

ころもほすとやあしひたくらん

そてふる、花たちはなにちきるとも

たかしのふへきゆくすゑもなし

秋

ふるさとのみまくほしさのいさなひに

ゆきてはきぬるはつかりのこゑ

いくかへり月みしあきはすきぬれと

なむるまゝにぬる、そてかな

あきされはしもをきまよふ麻のはを

よはにふみわけしかはなくなり

冬

さてもなをこのはの色やまさるらむ

ちりしくにはにふるしくれかな

恋

伊勢の海ののを、みなとのをつから

ちりつもる花のうへふく春風に

またふりかはるにはのしらゆき

夏

183

184

「17才

185

186

187

188上

「17ウ

112下

113

114

115上

「18才

128

昨日かもわかなつみしは片岡の

あしたのはらにしけるなつくさ

秋

いろかえぬ竹のはやまに吹風の

をともしやかに秋はきにけり

風ませにひとよふりしく秋の雨に

けさはさひしきのへの色かな

冬

やまさとのみねのあらしやよはるらん

このもとさらすちるもみちかな

恋

夏川のうふねのか、りさしもなと

よるはおもひのもえまさるらん

いかにしていかなる江にかしほたれし

いはきのはまのあまのさ衣

雑

山ふかみほとなきいほのいたひさし

さすかにすめはすまれけるよを

春

このころの雲井の月をなかむれは

むかしのはるはかすまさりけり

雑

したひくる月をかたみのうら浪の

みやこをかけてのこるおもかけ

129

130

「18ウ

101

102

103

104

「19ウ

105

106

107

108

「19ウ

125

めぐりあふ月日はかりのおなし名や
むかしをのこすかたみなるへき

いつれの日いつれのときを契をきて

あはれいのちのかきりなるらん

(二字分スリ消シタ跡アリ。「春」ト書カレテイタカ)

「20才

山家

ふるさとのみやこの秋のゆふへにも

まつにはかゝる風やふくらん

雑

秋はつるかりたにおふるひつちほの

みをなきものにおもひなしつ、

春

さくらはなけふこそさかりあしひきの

こなたかなたにたてるしら雲

のこりなきやよひのくれを契にて

さくほとつらきやまふきのはな

夏

なきぬなりとはかりいひて山かつの

こゝろにとめぬ郭公かな

郭公みわのしめなはいくかへり

神代のごゑになきふるすらん

春

ちらはなをおしますはあらしさくら花

みなはるなからとしはくるとも

「21才

156

155

154

153

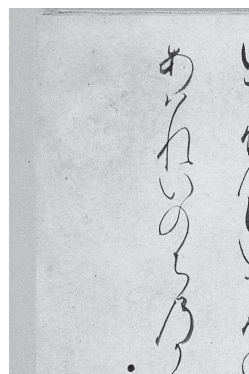
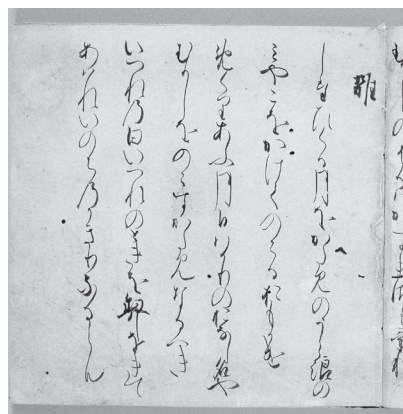
152

151

150

127

126



ちる花のなかれてくたる吉野川

はるもみなとやとまりなるらん

さためなきよにも我身のなからへは

いくたひはるのわかれしたはん

夏

あやめ草たまにぬく日の郭公

けふさへ人に猶やまたれむ

すゝか山ふりはへやまぬ五月雨に

わたるをかはも水まさりつゝ

秋

あさちふの草葉のつゆもをきそめて

そでのほかなる秋やみゆらん

草も木もしくれぬほどはあるものを

おくてのをしねほしやわふらむ

冬

千早振神代のしくれいかなれば

ときはの山をそめのこしけむ

もみちはをむすひとゝむる山河の

こほりやあきのとまりなるらん

あらちをのとかりのゆすゑふりたてゝ

いるよりはやくゝるゝとしかな

いたつらにふけぬる月をあはれとも

たかならはしにおもひそめけむ

雑

157

158

159

160

161

162上

192下

193

194

195

95

いかにせむ身をははかなくおもふとも

うきはくちせぬなにとまらむ

春

さくらさくたかまのあらし吹にけり

かつらき山にくもそすくなき

夏

谷河のさゝのはわけにゆく水の

いろこそ見えねをとそすゝしき

秋

みやきのはあきゆくしかのあともおし

うつろふころのつゆのはきはら

なにはかた秋のなかはのゆふしほの

みちてさやけき浪の月かけ

荻の葉のそよそのことゝなけれども

あき風ふけはものそかなしき

やまのはのきりふきわくる秋風を

しるへにいつるさよの月かけ

冬

うきなからをくりむかふるおなし身に

またあらたまのとしもうらめし

恋

いもせ山なかゆくかはの水はやみ

せくにせかれぬわかなみた哉

ものゝふのとかりのゆつるたえすとて

96

97

98

99

100

118

119

120

121

122

「21ウ

「22オ

「22ウ

「23オ

「23ウ

「24オ

たのむはかりのゆくすゑもなし
我恋はしのふのをかにかる草の

123

つかねをよはみみたれてそ思

こひにつれなきいのちなりけり
雑

139

あはれいかにつらき命のなからへて

124

秋をへてそてになれたる月くさの
うつりはてにし世をしのひつゝ、

かはるこゝろのすゑをみるらん

「24ウ

春
あくるよりよものかすみのしき鳥や
やまとしまねに春はきにけり

「26オ

140

むすひもあかぬ水のいろかな

143下

さえあへぬいつの雪まに春はきて
よしのゝ山のまつかすむらん

秋

しもむすふ秋のよさむになるまゝに

144

夏
なかれいつるうらやま川のおちあひに
ひかたすくなき五月雨のころ

141

うちもたゆまぬあさのさころも

145

なつ山のたきのしらいとなかきひに

わきてなをいかなるそらにふる雨を

146

明日香川ふちせもしらぬさみたれに
雲さえふかきかつらきの山

しくれといひてこのはそむらん

147

ひくらしのなくねよりをく夕露に
かついろかはるもりのしたくさ

すゑとをきかと田のいなはかたよりに

148

たかみそきなみのしらゆふ秋かけて
ふくやたつたのよはのかは風

ゆくかたみゆるあきの山かせ

「25オ

冬
浅茅生の草のときしのこからしに
露のやとりのあれまくもおし

143上

恋

いかにせむおしまれぬよになからへて

149

おきつ風ふきあけの千鳥なく聲も

せめてもこひの身をくたくかな

138

はかなさは世のことはりもあるものを

この世にていかにわすれむかたもなし

137

はかなさは世のことはりもあるものを

こひはいのちのかきりなりけり

138

はかなさは世のことはりもあるものを

旅

ゆくまゝにをくれさきたつ旅人の

149

はかなさは世のことはりもあるものを

かたみにかすむゝさしのゝはら

「25ウ

はかなさは世のことはりもあるものを

さためなき人の心の花さかり

137

はかなさは世のことはりもあるものを

いつよりいろいろうつろひにけむ

138

はかなさは世のことはりもあるものを

はかなさは世のことはりもあるものを

138

はかなさは世のことはりもあるものを

いそへのなみのよるそかなしき

旅

おもひやるこゝろやゆきてしくるらん

雲こそかゝれふるさとの山

(二字分スリ消シノ跡アリ。薄ク「恋」ノ字ガ残ル)

「 27ウ

夏

いくかへり山郭公まちわひて

なくねにあかぬとしもへぬらん

秋

うきまゝのなみたのいろにとしふりて

そてにぬれそふ秋の夜の月

たちわたるきりより上をゆくかりは

さやけき月のかげやみるらん

冬

うちわたすこまもなつみの河よとに

やまかせさむくこほる冬かな

述懐

おもひこしわかあらましのすゑのよは

そてになみたのかゝりけるみを

秋

わすられぬむかしを月にのこしつゝ

まつあきみゆる月のかげ哉

秋ふかくいくかしくれて龍田やま

のこるいろなくもみちしぬらん

「 28ウ

「 28オ

163 162 112
下 上

111

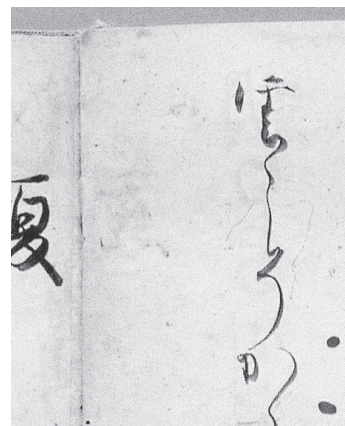
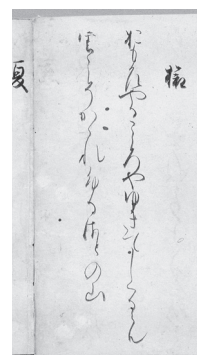
110

109

108

107

94



冬

風さむみゆくかたしらぬ、ま水の

こゝろのまゝにこほるよはかな

しからきのとやまのおくのいかならむ

みやこもふかきけさの雪かな

ゆふつけとりのねにわかれけむ

ありといふさらぬ別にさきたちて

みまくほしさをなけかすも哉

むはたまのぬるかうちなる夢ならて

またあふことはたのむよもなし

ともすれはつらさはさてそわかれゆく

こひしきかたのこゝろよはさに

山家恋

あか月のとりのねきかぬみ山にも

ねさめそよはのほとはしりける

述懐

ありとてもいまいくほどの行すゑに

わか身ひとつをおもひわふらん

祝

君かへむ千世をこめてやたましきの

みかきの竹をうへはしめけむ

知家

大宮三位入道撰

春

164

165

「 29 才

170 169 下

171

172

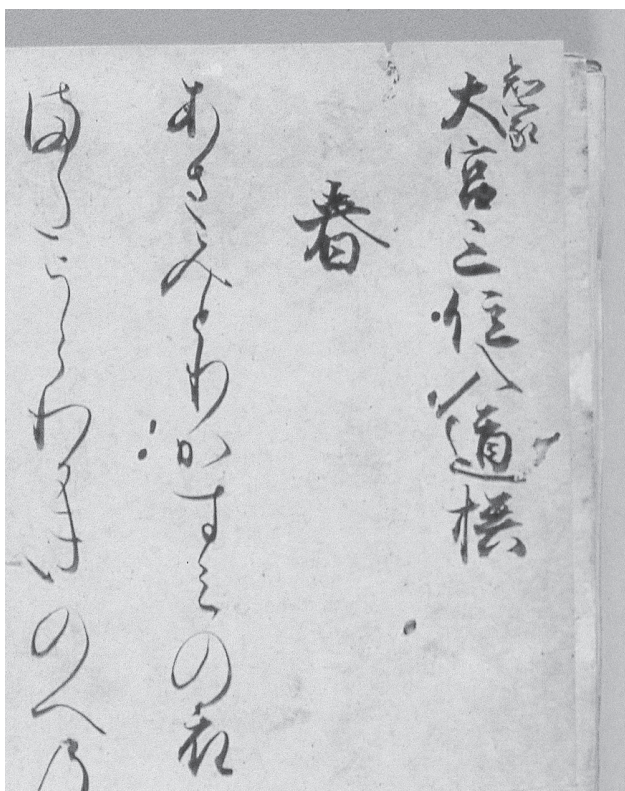
「 29 ウ

173

174

175

「 30 才



あさみとりかすみの衣はる草の
 またうらわかきのへのいろかな
 なにはめのたくやあしひのうす煙
 わかものかほにかすむはるかな
 あさなくうつろふころのさくら川
 しらゆふ花にはるかせそふく
 くれなるのうすそめ衣きてもなを
 こひのなみたのいろはみえけり
 おもひあまりさためなき世をたのみつ、
 つれなき人を猶やこひまし
 住吉のまつはかひなきそてぬれぬ
 きしもせぬよのなみはかけつ、
 くゆるとも人はしらしなしなのなる
 うき身こかれてよをやつくさむ
 こゝろをはわかなくさめし行す糸の
 あらましことそまぢよはりゆく

愚詠自隠岐被召撰出給之

(白紙) 31ウ
 (白紙) 32オ
 (白紙) 32ウ

〔付記〕 貴重な典籍の閲覧及び翻刻・図版の掲載を許可して下さった静嘉堂文庫に厚く御礼申し上げます。